

異文化における移住者の アイデンティティ表現の重層性

——在日韓国・朝鮮人の墓をめぐって——

李 仁 子*

本稿では、日本へ移住し定着しつつある在日韓国・朝鮮人（特に在日一世）が日本に建てた墓を事例としながら、異文化社会に移住者として生きる人々のアイデンティティ表現の特徴を引き出すことを試みる。大阪近郊には少なくとも2つの在日韓国・朝鮮人専用霊園が存在し、日本風の墓碑を伴った墓が多く建立されている。景観的には日本のふつうの靈園と大差ないが、しかしその墓碑面には、日本人の墓には見られないような故人に関するさまざまなデータが刻まれており、四面全部が文字に埋め尽くされているケースも珍しくない。こうした墓誌の特異性は、彼らの祖国における墓の文化的重要性を彷彿させるとともに、墓が自己表現のメディアになっていることを予感させる。そこにはまた、移住者による新たな文化創造の可能性も見て取ることができる。墓誌の具体的な内容には、朝鮮の民族的文化要素が多用されているため、一見するとそれは「民族的アイデンティティ」の表現であると捉えられがちである。しかし、在日社会一般ではなく「個人」あるいは「家族」といった次元に着目してみると、民族的アイデンティティの表現と見えたものが全く異なる相の下にたち現れてくる。そこから、民族性の問題に主たる関心を注いできた從来の在日韓国・朝鮮人研究では見えてこなかった、移住者として生きるものとのアイデンティティとその表現の重層性が浮かび上がってくる。

キーワード：移住者、在日韓国・朝鮮人、墓（墓誌）、アイデンティティ表現、重層性

目 次

はじめに	3. 入日本國祖になる一世たち
1. 問題の所在	S家の事例
調査の概要と二つの墓地の沿革	P家の事例
2. 墓誌の内容に見られる特徴	4. 考察
墓誌の正面	おわりに
墓誌の側面と裏面	

* 京都大学大学院

はじめに

現代世界において、いわゆる国際化の流れはさまざまな要因によって強化されつづけており、情報の流ればかりか、固有の文化を担った人々が異質な文化社会へ移動するという人的な流れも、よりいっそう増大してきている。それについて、異文化に生きる移住者の数も増加の一途をたどっている。こうした移住者（個人にしろ集団にしろ）は、当然のことながら、移住先の異なる環境において何らかの形で自己を表現しようと試みる。それはごく日常的な意思や情感であったり、移住者ならではの労多き足跡であったり、あるいは政治的な熱き想いや宗教的信念であったりと、内容はさまざまであり、また表現方法もバラエティに富んでいる。しかし、いずれにせよそこで目指されているものは、己のアイデンティティあるいは自分らしさを周囲に表現することである。一般にこうしたアイデンティティの表出に対する移住者の希求は高く、かつ独特的の色合いを帯びていると考えられる。移住者はホスト社会においてマイナリティの位置に置かれがちであり、また年を経るにつれて移住者集団の規模が大きくなり、移住者集団内部での分化が激しくなるからである。同時にこうした移住者による自己表現の現場には、移住者であるがゆえの必然として、文化をめぐる問題状況が常につきまとってくる。ある文化を担って移住してきた人々は、異なる文化的社会的環境で生きているわけであり、その中で自らのアイデンティティやメッセージを外に向けて表出しようとすれば、既存の文化の枠内に留まらない、自らの生に適合した独自な文化を少しづつ創造していかざるをえない。移住前から生きてきた文化と移住後に生きるようになった文化、その双方に寄り添いつつ、同時にどちらの文化にも違和感を禁じ得ない移住者としての自己をどのように表現していくか。人的移動の増大は、二つの文化のはざまで創造性を

発揮しつつ自らのアイデンティティの十全なる表現を模索する人間の増加を意味している。

本稿で取り上げる在日韓国・朝鮮人も、移住先の日本という異文化社会において、ホスト社会との間での摩擦や葛藤を経験しつつ、同時に「在日同胞」内部における多様なずれや差異を孕んでいる。そしてその中で、自らが背負ってきた文化だけに固執するのではなく、移住先の異文化に完全に同化してしまうのでもなく、異なる文化環境の影響下で新たな文化の創造を積み重ねながら、自らのアイデンティティや自分らしさを表現していると考えられる。そこで本稿では、新たな文化創出を伴う自己表現の現場、あるいは方を、日本へ移住し定着しつつある在日韓国・朝鮮人¹⁾（特に在日一世）が日本に建てる墓を事例としながら記述し、移住者として生きる「個人」あるいは「家族」を視野の中心に置くことによって、そのアイデンティティ表現に見られる重層性を引き出してみたい。

1. 問題の所在

在日韓国・朝鮮人が作る墓は、決して伝統的な形式や出来合いのものをただ踏襲しているわけではなく、それぞれ個性的なものが多い。彼らにとってこのような墓は、死者を埋葬する、祖先を記憶する装置という本来の意味以外に、様々な表現のメディアとしても重要である。「自分らしさ」を公に表現できるメディアをもつ人はそう多くない。しかし、墓を作ることは自分らしさを現わすことのできる数少ない機会になりうる。在日韓国・朝鮮人の墓は、移住先の日本と祖国とのはざまで生きていく人たちの家族や個人の文化的自己演出を具体的に見てくれる事例なのである。本稿はこうした、移住先の地に建てられた在日韓国・朝鮮人の墓を通してそれにかかわる人々のアイデンティティ表現の重層性を明らかにしながら、移住者による文化創造に関する理解や移住者のアイデンティ

ティへの洞察を深めていくための布石づくりを行っていく。

これまでになされてきた在日韓国・朝鮮人の研究は、そのほとんどが日本社会の中での彼らの「生活」に密着したものであった。そこでは人権問題、法的問題、日本での不平等な立場など、生活に直接関係のあるテーマがとりあげられている。また、在日韓国・朝鮮人が集中して住んでいる地域を対象として、人類学的調査も行なわれている。しかし、それらの研究も主として民族的マイノリティとしての側面に焦点をあてたものであり、その社会的位置や差別の問題が中心的なテーマであった²⁾。韓国内においても在日韓国・朝鮮人に関する研究は行われているが、そのほとんどは在日の一般的な状況を紹介する程度にとどまっている³⁾。このように、研究の関心がマイノリティの人権や差別の問題に集中したのは、くだんの集団の置かれている立場からして無理からぬところではある。しかしその結果、移住者たちのアイデンティティ表現とそれに伴う文化創造といった、いわば能動的な相貌は見過ごされたままになっている。

こうした研究動向の中にあって、在日韓国・朝鮮人の社会を文化、宗教、社会構造などの諸側面から見ていくとしているのは、飯田剛史教授（富山大学）を代表とする共同研究グループによる、在日韓国・朝鮮人の祖先崇拜および親族会の研究である⁴⁾。このグループの研究は、在日韓国・朝鮮人をマイノリティの民族集団として捉えるのではなく、日本の親族会における祖先祭祀を通じた固有の文化の創造（飯田1995b:256-257）、「民族」的言説の生成（小川・寺岡1993:43）、など能動的な面についても論じられている。しかし、これらの成果はアンケート結果の分析を中心にしており、個々の事例に沿って述べられているわけではない。そのため、そうしたことがどのような文化要素を用いることによって、どのような文脈において起こっていることなのか、は明らかではない。

このグループの研究で本稿と最も関係深いの

は、孝本貢「在日コリアン家族における先祖祭祀」（孝本1993）である。そこでは光山金氏専用霊園（後出）の墓を材料として、死亡から納骨までの期間、建立年代、本国にも墓をもつ人の割合、墓誌の様式等による分類が行われている⁵⁾。孝本のこの研究は、墓や先祖祭祀が在日韓国・朝鮮人の民族的アイデンティティの表現の場にもなっていることにいち早く着目したものであり、その点は高く評価されうる。しかし、ここでも墓碑のタイプロジーを中心にしていて、もっぱら民族アイデンティティやエスニックな祭祀文化の維持あるいは分化という観点からしか捉えられていない。

このように、このグループの研究はエスニシティを親族会や祖先祭祀を通して生成するものとしてみている点は評価できる。しかし、その生成過程そのものは調査方法上の制約のため、具体的に記述され考察されている訳ではない。そのため、なぜ祖先祭祀や墓のあり方が「民族文化」としてあらわれるのか、について問うことができていないのである。また、さまざまな属性間の関係はみることができても、具体的な個人について、そのような属性がどのようにアイデンティティを構成しているかは、不分明のままにとどまっている。さらに、先に上げた在日韓国・朝鮮人研究の多くと同様に、関心はエスニシティあるいは民族的アイデンティティに向かっている。しかし、冒頭に述べたように在日韓国・朝鮮人の集団内部にも、差異やずれは存在しているのである。

ことさらにいうまでもなく、人は誰でも本来、民族だけでなく、様々な社会関係における差異と共通性からなる、複合的もしくは重層的なアイデンティティを持っている。とすれば、民族的アイデンティティのみを特権化するわけにはいかない。また、少なくとも墓碑は、個人もしくは家族のために建てられるプライベートなものである。それゆえ、民族性の維持装置としてよりも、むしろ一人ひとりの個人（一つひとつの家族）の自己表現として、まずは捉えら

るべきであろう。

松田素二是人類学における、「個人」に焦点をあてた研究の流れを追った上で、次のようなことを述べている。すなわち、自己（セルフ）は社会からの客観的拘束性と個人の主体的想像力とのダイナミズムの過程で不斷に「選択」を行う。この選択には二つのレベルがある。それは選択肢の範域に関わるレベルと、個人がその選択肢の中からなにかを選ぶというレベルである。第一のレベルではかなり社会的・文化的な規制がかかるが、新しい選択肢を創造することも不可能ではない。そして、第二のレベルにおいて、個人は最も創造性を發揮することができる（松田1995:200-202）。本稿でも、在日韓国・朝鮮人が作る墓を材料として、その際の文化的な選択肢、その範囲、選択の行われた結果として実際に作られた墓から読み取ることのできるメッセージ、およびその重層性について考えてみたい。

調査の概要と二つの墓地の沿革

在日韓国・朝鮮人の死後の処理の方法は大きく三つに分けられる。第一に日本の寺や在日韓国・朝鮮人が主な信者となっている寺に納骨するケース、第二に祖国（韓国・北朝鮮）に墓を建立するケース、第三に日本に墓を建立するケースである。それぞれの正確な比率は計測不能であるが、数的に多いと予想されるのは第一の各寺に納骨するケースである。

本稿で扱うのは第三のケースにあたる。このケースに関しては、まず聞き取り調査の結果から大よそ次のようなことが言える。すなわち、戦前から1965年の日・韓協約成立の頃までには、日本に墓を作ることは一般的ではなかった。作るにしても、帰国を前提に、いずれ祖国に移葬するつもりで作った人が多かった。その後、子孫たちが日本に永住することが自明になってくるにつれて、日本に墓を建てる人が増えていった。ときには、墓を建てることが、永住する決意を固めるきっかけになったこともあると

いう。しかし、今でも在日一世たちの間では、火葬に対する抵抗感から韓国に墓を作つて土葬してもらいたいという気持ちや、せめて骨だけでも生まれ故郷に埋めてほしいと願う心情が根強い⁶⁾。こうした想いがありながら、それでもなお日本に自らの生前墓や配偶者の墓を作るには大きな決意がいったであろう。しかもそれは、いくつか有る選択肢の中からそのひとつを選んでのことである以上、その墓は、何らかの意思（一つの断念であるにせよ強い決意であるにせよ）の表現と見るべきものである。もちろんその一方で、その家族・子孫にとって年を重ねれば重ねるほど日本が根拠地になっていくため、一世たちの願いを叶えることは容易ではないという現実的な選択理由も、そこにはあるのではあるが。

大阪周辺の在日韓国・朝鮮人が主たる建立者となっている墓地には、彼ら専用の墓地として高麗寺靈園墓地と光山金氏専用靈園があり、他に日本人の墓と混在しているが比較的在日韓国・朝鮮人の墓が多い一般靈園として地蔵院共同墓地（大阪府）、萩の台靈園（奈良県）、信貴山公園墓地（奈良県）などがある。本稿では、このうち特に筆者が重点的に調査することのできた先の二つの在日韓国・朝鮮人専用靈園を事例として見ていくことにする。

高麗寺靈園墓地は京都府相楽郡南山城村童仙房にある。高麗寺は在日大韓佛教曹溪宗の大本山であり、同宗の日本での総本山は大阪の生野区に所在する普賢寺である。双方とも信者のほとんどは生野区の在日韓国・朝鮮人であり、とくに済州道出身の女性信者が多い。普賢寺は韓国から来日した僧により1968年に建立された。1972年に日本政府から宗教法人として認証され、1973年に在日曹溪宗総本山になった。その後、高麗寺の敷地6万坪を確保、その3年後の1978年には朝鮮固有の伝統建築様式の本堂を落慶すると同時に、靈園墓地も開園した（宗教法人曹溪宗総本山普賢寺 年不詳）。1974年から1984年にかけて順次完成した墓地は、総面

積は3500坪で、信者と信者が紹介する在日韓国・朝鮮人に分譲された。まだすべての区画が墓碑で埋まっているわけではないが、区画の分譲は終わっている。分譲終了が早かった理由は、同一家族の各世帯が隣接する場所に墓を建立できるよう信者一人当たり複数の区画を購入することを寺院側が勧めたからである。その後、新規造成分として約5000坪を計画し、現在工事が行われている。靈園を造成した初期には、石塔、水子供養塔、仏像などを韓国の石で作り、直輸入した。韓国で作った方が制作費が安いうえ、故郷に愛着を持つ人々に喜ばれることであったと管長は言う。

もう一方の光山金氏専用共同靈園は、奈良県生駒郡平群町にある。光山金氏は、新羅の王子興光を始祖とする韓国でも有力な一宗族である。光山金氏親族会は、大阪に在住する済州道出身者を中心に1954年に結成された。そのため靈園の95%が済州道出身者の墓である。墓地の建設は1957年の総会において提案され、1961年に現在の位置に開園している。このような早い時期に靈園設置が提案されたのは、在日社会では異例のことである。ここでは高麗寺靈園とは異なり会員一人に一区画しか割り当てられなかつたが、200あまりの区画はすでにいっぱいになっている。

当時の会長は、植民地時代が終わった後でも日本に住んでいる以上、ここでの生活は今後も永く続くだろうと思い提案した、と回想する。しかし、永住を考えて靈園を設立したわけではない。光山金氏靈園設置趣意書によれば、当初、「故国安定をみた暁には当事者の意志にしたがって移葬できるようにする」(在日光山金氏親族会 1989:155)ために靈園を設置したのであり、一時的な埋葬と考えられていた。これには戦後の済州道の情勢が強く影響している。多くの在日朝鮮人は戦後帰国したが、しかし済州道出身者のなかには1950年～53年の朝鮮戦争と1947年～53年の4・3事件⁷⁾によって、再度日本に渡らざるを得なかつた人々も多かつたの

である。会長をはじめとする会員からの聞き取りによれば、光山金氏親族会の結成当初の中心メンバーには、4・3事件などに関与した若い知識人層も多く含まれていた。

この二つの靈園は、移住者の中でも、祖国の文化にこだわりを持ち、その啓蒙を志す人たちの指導の下に作られたという点で共通している。それは、高麗寺の場合は韓国から来た僧侶であり、光山金氏靈園の場合は済州道の伝統をよく知り、宗族の歴史にも明るい指導者たちであった。彼らの中には、戦前に帝国大学を卒業したエリートも多かった。一方、実際に墓を建てる信者や会員にとっては、在日韓国・朝鮮人専用の墓地であるということで、日本式の墓に縛られないことなく、墓の表現の幅が広がるという利点があった。

しかし、この二つの靈園には違いもある。それは、形式や規模についての規制である。前述したように、光山金氏靈園では一つの区画が同じ広さであり、会員一人の所有区画の数も一つと決まっている。また、墓誌の文面を事前に親族会へ提出することになっている。もちろんこれららの規約も完全に守られているわけではない。しかし、それぞれの墓の間に、はっきりと見てわかるような違いが生じないような配慮がなされてきている。一方の高麗寺靈園には、のような規約は存在せず、区画の大きさにも差がある。このような違いが生み出す表現の違いについては、本稿では十分にふれる余裕がないので、必要な範囲で適宜述べることにする。

2. 墓誌の内容に見られる特徴

在日韓国・朝鮮人の墓制を考えるときには、韓国⁸⁾と日本双方の墓制に照らして考察する必要がある。なぜなら、在日韓国・朝鮮人の墓は、韓国と日本の墓制のはざまにあるからである。ただ、両方の墓制をここで詳述することは困難であるし、この論文の趣旨でもない。そこで、本稿にとって必要最小限のことがらだけを

記しておく。

韓国の墓制は、死者を土葬にして土饅頭を作る形式が一般的である。また、済州島には夫婦と一緒に合葬する合墓、同じ区画のなかに二つの封墳を作る双墓があるが（玄容駿 1977:254），個人ごとに一つの墓（個人墓）⁹⁾を作るのがふつうである。墓碑は家によって建てたり建てなかったりと一定していないが、建てた場合でも墓石面に刻むものは、本貫¹⁰⁾、姓名、生年、没年ぐらいである。李氏朝鮮時代には、墓の規模や形式は身分によってきびしく制限されていたため、墓碑を建てるこことさえ一般の庶民には珍しいことであった。しかし、1980年代に入り韓国では、経済発展とともに成功した人々が、祖先のために、あるいはまだ生存している自分自身のために王陵のような墓を建てることがやはり、社会問題にまでなった（朝倉 1993:64-69,72 尹 1983:227-231）。現代韓国では、墓は一家の成功を目にする形で現わす手段として利用されているとも考えられる¹¹⁾。

一方、現代日本の墓制は、火葬の家族墓が一般的である。今日では、墓碑をともなうものがほとんどである。その墓碑の書式は、都市圏に位置する霊園墓地の場合「□□家先祖代々之墓」とする形式がほとんどで、墓誌や靈標に物故者の戒名、死亡年などを刻むのが一般的である（藤井 1993:17-18）。また、韓国の墓制が儒

教の形式にのっとっているのに対し、日本では仏教の影響が強く、宗派によって墓誌の書き方にも様々なバリエーションが見られる。

こうした二つの墓制の間で作られる在日韓国・朝鮮人の墓は、初期においては、土饅頭を設けるなど日本では異彩を放つ形状のものも多かった。しかしその後は、現在の日本で標準的と思われる様式を採用しているものが多い。調査した二つの霊園でも、形状自体はごく普通の日本的なものが多く、孝本も言うようにその景観は日本の一般的な共同墓地のようである（孝本 1993:186）。しかし、少し近寄ってその墓誌面を見てみると、そこには日本人の墓には見られない事項が刻まれている。

墓誌の正面

以下、在日韓国・朝鮮人が日本に作る墓の特徴を順次、見ていくことにしよう。在日韓国・朝鮮人の墓は、かなりの割合で、その墓碑の四面すべてが文字で埋め尽されている。そのうち、まず正面部分について述べる¹²⁾。

図1は正面の書き方の典型例であるが、一見して日本のものとは相當に異なるという印象を与える。特に本貫や官位が刻まれていることは日本人の目に奇異に映るであろう。とはいえたまの正面は、日本の墓と同じように、おもに被納骨者が誰であるかを明示する部分になってお

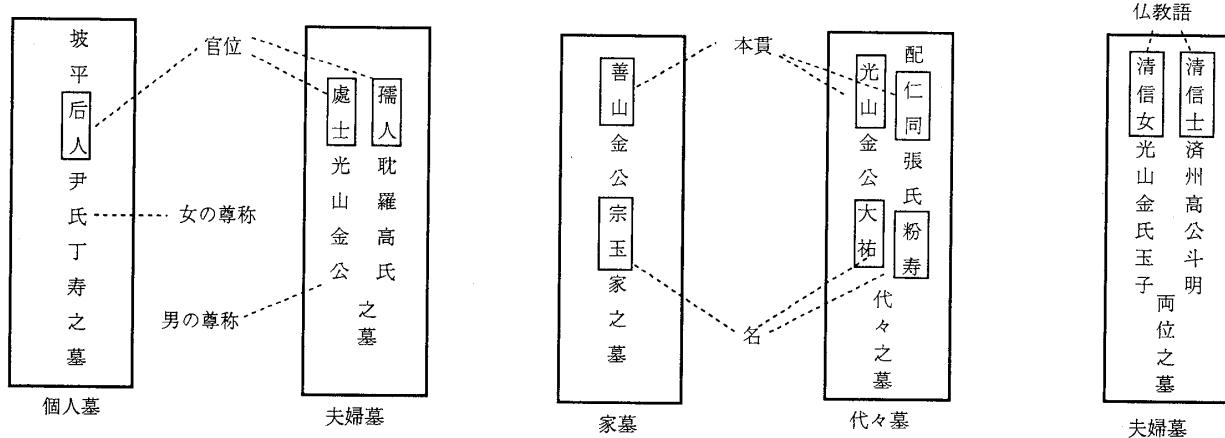


図1 墓碑正面の記載例（以下事例にはすべて仮名を用いている）

り、その墓が個人墓か夫婦墓か、あるいは家族墓なのかを、とりあえず表示している。碑文の末尾に用いられる言葉の違いによって、二つの専用靈園にある墓を整理すると、個人墓、夫婦墓、家墓、代々墓のおよそ4タイプに分類できる¹³⁾。

表1は正面の書き方について、姓以外にどのようなものが併記されているかを各タイプごとに集計したものである。そこからわかるように、どちらの靈園でも個人墓と夫婦墓が多く、家墓と代々墓は少ない。また、かなりの墓碑に官位と本貫が併記されている。

この分類において、「家墓」と「代々墓」は日本のそれらとはかなり異なる特徴を持つ。まず代々墓（図1参照）であるが、それは日本ではふつう「先祖代々之墓」を意味する。「代々」という表現を含む墓碑は朝鮮には見られないことから、日本の墓の一要素が借用されたものと推測されるが、その内容はすり替えられている。というのも、彼らの先祖の墓はすでに本国に作られているからである。成功した在日韓国人の多くが韓国にある祖先の墓の整備に励むことからもわかるように、彼らの間では先祖代々の墓は祖国の故郷にあるものと認識されている。在日韓国・朝鮮人の移住後の歴史が浅いことも勘案すれば、「代々」という表現で意味されているものは、昔からの（過去からの）先祖代々というよりも、むしろこれから（一世から）後の

世代であると考えられる。彼らの代々墓が、図1のように一世男性の姓名に続けて「代々之墓」と刻んだり、一世夫婦の姓名を並記した下に「代々之墓」を付け足したりするという、独特的の表記スタイルをとっていることも、そのように考えれば納得がいく¹⁴⁾。

「○○家之墓」という表記スタイルをとる「家墓」の場合にも、これと似たようなことが起こっている。「○○家之墓」という表記は日本の墓の様式を受け入れたものであり、たしかに「○○」の部分が被葬者の男性の姓のみ（本貫をともなってはいるが）となっているケースも、全31基中の約半数（14基）を占めている。しかし、残りの半数（17件）では、「○○」の部分に被葬者の男性の姓だけでなく名までも記されているのである（表1参照）。この場合、代々墓のように完全に意味が読み換えられているわけではないが、個人の姓名と「家之墓」という言葉の組み合わせには、その墓が単に家族も合葬される家の墓であるという意味以上のものが込められていると考えられる。それは、被納骨者である在日一世の男、夫であり二世たちの父である人間が、家族を代表する存在であるという自己表現、あるいはメッセージであると考えられるだろう。つまり、こうした形式の墓碑を建てることで、墓の被納骨者たちは移住先の日本における「家」「代々」の起点としての自らのアイデンティティを表現しているのである。

表1 墓碑正面の表記形式と併記形式（以下表はすべて筆者調べ）

表1-1 光山金氏靈園

正面形式	官位	本貫	名	仏教語	姓のみ
個人墓（全44基）	27	34	35	1	0
夫婦墓（全62基）	34	59	58	3	0
家墓（全7基）	0	6	2	0	0
代々墓（全14基）	2	12	13	0	0
その他（全3基）	1	2	2	0	0

（石塔のみを集計の対象とした。）

表1-2 高麗寺

正面形式	官位	本貫	名	仏教語	姓のみ
個人墓（全28基）	8	28	28	2	0
夫婦墓（全46基）	15	45	45	6	0
家墓（全24基）	0	23	15	1	1
代々墓（全1基）	0	1	0	0	0
その他（全1基）	0	0	0	0	1

表2-1 光山金氏靈園墓誌の内容(基) 表2-2 光山金氏靈園墓誌の内容2(基)

要素	を含む	のみ
祖先	53	2
入島祖	41	3
渡日時期	34	2
個人史	27	3
墓碑銘	15	4

構成	を含む	のみ
祖先+入島祖	33	9
祖先+渡日時期	30	4
祖先+個人史	25	2
祖先+渡日時期+個人史	21	5
祖先+入島祖+渡日時期	20	7
祖先+入島祖+個人史	16	3

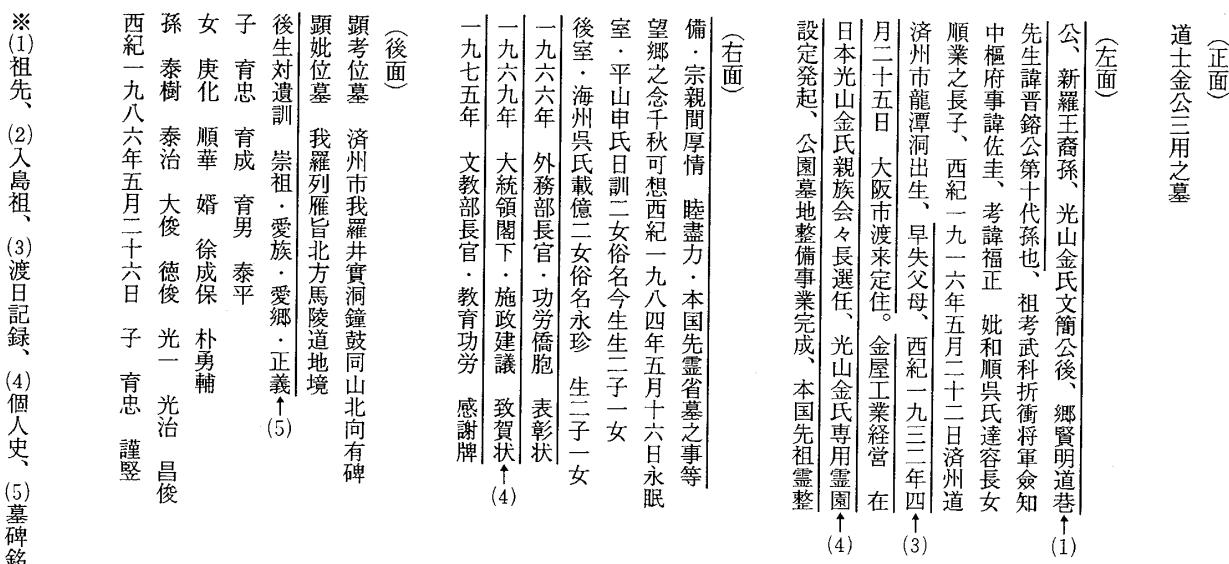
(石塔128基・靈標5基あわせて133基のうち、65基に墓誌あり)

このように家墓や代々墓では、「家之墓」や「代々之墓」という日本式の表記が，在日韓国・朝鮮人たちが墓を建立する際の状況に沿って使われ、その意味も変えられている。日本の文化要素が移住者である人々の置かれた状況にあわせて本来の文化的コンテクストからはずされ、新たなコンテクストの下に再編成される形で利用されているのである。

墓誌の側面と裏面

以上に見てきた正面書式の他にも，在日韓国

・朝鮮人の作る墓碑には数々の際立った特徴がある。正面を除いた他の三面には、たしかに被納骨者の生年月日や没年月日、墓碑の建立年月日といった、日本の墓にも韓国の墓にも共通して見られる事項が記載されているが、そうしたいわば一般的な記述の他に、先祖や子孫の名前、被納骨者の個人史、遺訓などを記した長文の墓誌を有する墓が目立って多いのである（事例1参照）。試みに、光山金氏専用靈園に建てられた墓碑すべてを対象に、こうした長い墓誌の内容を次のような5つの要素別に集計したも



事例 1

のが、表2である¹⁵⁾。

- (1) 祖先：始祖や派祖あるいは著名な先祖
- (2) 入島祖：済州入島祖胤祖
- (3) 渡日記録：「〇〇年渡日本」といった渡日時期と渡日の際の状況
- (4) 個人史：職業や業績、表彰の事実、団体での肩書きなど
- (5) 墓碑銘：遺訓や被納骨者への賛辞などの文言

この靈園には1994年の調査時点で133基の墓碑が建てられていたが、そのうち65基に長文の墓誌が記されていた。表2からわかるように、一つの要素だけを記したもののは少なく、たいていはいくつかの要素が組み合わされている。以下、それぞれの要素について簡潔に解説していく。

(1) 始祖や著名な祖先 光山金氏専用靈園では、被納骨者が、始祖である新羅の王子から数えて何代目の子孫であるかを墓誌に明記しているものが少なくない。光山金氏全体の始祖とされている新羅の王子（興光）は今から1100年以上も前の人物であるから、多くの人がそこから何代目であるかを個人的な墓誌に記していることは、部外者にはいささか奇異な印象を与える。しかし、記されるのは始祖だけではない。墓誌にはまた始祖に統いて被納骨者の属する派の祖や¹⁶⁾、朝鮮時代の科挙制度の中で官位についた著名な祖先の名を挙げ、そこから何代目であるかを記すケースまである。さらにまた、ほとんどの場合、最後に四代前の祖父から被納骨者の両親までの名前が列挙される¹⁷⁾。このように、長文の墓誌には墓の主が始祖から何代目の子孫であるかが、くどいほどにくり返し表明されているのである。そこには、祖先から子孫への系譜における自らの位置を確認するとともに、自らの出自の正統性を主張する狙いがあると考えられる。

(2) 「入島祖」 光山金氏専用靈園に墓碑を建てた在日韓国・朝鮮人は、その9割以上が済州道出身であり¹⁸⁾、そのため祖先に関する記述

の中に「入島祖」を含むもののがかなり多い。一般に韓国には宗族の移住の歴史をあらわす存在として、内陸部には「入郷祖」というものがあり、同様に島嶼部には「入島祖」というものがある¹⁹⁾。「入島祖」や「入郷祖」にまつわる伝承によれば、そうした祖先ははじめ中央において高い官位についていたが、正義を守ったがゆえに落郷を余儀なくされ、地方や島に移住したとされる。済州島では、そこを本貫地とする高、梁、夫の三姓以外のほとんどの宗族が、祖先の系譜のどこかに、最初に済州島に入ったいわば移民第一号とも言うべき「入島祖」を持っている。光山金氏の場合では、興光の17世孫である胤祖が済州島への「入島祖」とされているが、その入島は約600年も昔の話である²⁰⁾。「入島祖」や「入郷祖」を祖先に持つ氏族は、この伝承を保持・継承しているが、それは氏族の起源が中央の高い身分の人物にあったとすることで自己集団を差異化し、地域社会の中でみずからアイデンティティを維持する作業でもあると考えられる²¹⁾。

しかし、実を言うと光山金氏専用靈園に墓を持つメンバーの大部分（済州道出身の光山金氏）にとって、こうした始祖や入島祖、あるいは官位についていた祖先たちは、みなが共有している祖先である。したがって、始祖や入島祖から何代目にあたるかについて長々と記すことには、ほとんど何の意味もないよう思える。しかし、そうとも言い切れない。この点については、本稿全体の考察の中で、改めて取り上げよう。

(3) 個人の渡日に関する記録 墓誌にはしばしば「〇〇年渡日」とか「〇〇歳渡航」などといった渡日時期に関する記録が見受けられる。こうした記録は一世個人の記憶に基づくものであるが、生年月日や没年月日と同様に正確な日付を書くことによって、渡日時期にアクセントをつけた墓誌もかなりある。中には、十代の若さで、しかも単身で渡ってきたことを付け加えたり「早失父母」といった渡日の理由になった

		(右面)
公諱大祐本貫光山后人禮議公濟州始祖諱胤祖之↑	九世孫言論風旨灑落正大諱晋鎔大橋洞派祖也	(2)
始祖一八世孫石賛墓永樂里境峯↑	配信州后人康氏墓板浦里境↑	丁卯年享十九歲韓國濟州道移居于日本國始祖↑(3)
十九世孫己酉十一月三十日生忌西紀一九七三年	配信州后人康氏墓板浦里境↑	丁卯年享十九歲韓國濟州道移居于日本國始祖↑(3)
(壬子)五月二十九日	后人金明惠長女愛順貞順梅順良順玉順孫修	吉孫女孟子里奈秀美光美
娶于濟州后人高粉寿一男六女嗣子弘錫子婦金海	墓 奈良県生駒郡平群村大字福貴山南向	墓 奈良県生駒郡平群村大字福貴山南向
后人金明惠長女愛順貞順梅順良順玉順孫修		
吉孫女孟子里奈秀美光美		
墓 奈良県生駒郡平群村大字福貴山南向		
公忌五月二十九日		
配忌月日		
十九前冠渡日本身超越過人能處世天帝召命空於席↑		
異国星霜平生路擺拓赤手自立礎傳志子孫歸根肥↑		

事例 2

出来事を書くことによって、若い時期から苦労して今の身代を築き上げたことを窺わせるようなケースも、いくつか見られる。こうした被納骨者の渡日の時期や状況は、墓碑という半永久的なものに刻まれることによって、単なる個人の歴史というだけではなく、現在の在日する家族の源を語る家の歴史にもなっていると考えられる。

ここで「入島祖」と渡日記録とに関係する、興味深い一つの事例にふれておきたい。事例2がそれであるが、この墓誌（一部分）には一世の存在の大きさがきわめて強調された形で提示されている。特に文面なかほどに見える「移居于日本國始祖」という文言では、納骨された一世が「入島祖」の再現であるかのように表現されている。遺族の話によれば、この墓誌は父が亡くなった時、濟州道と日本の親戚が一同に集まって親族会議を開き決めたという。つまりこの墓誌の文言には、故人を渡日の祖とみなそうという親族一同の意思が反映しているのである。こうした意思はこの事例に限ったものではない。光山金氏親族会の役員の中には、濟州島の「入島祖」と同じようにわれわれ一世は日本に渡ってきた「渡日祖」になるのだ、と言う人もいる。

こうしたことから、入島祖という濟州島固有の祖先は単なる故人の系譜上の一要素にとどまらず、故人が渡日一世であるという事実と呼応することで、日本国始祖あるいは渡日祖といった新しい文化要素のひな形となっていることがわかる。「入島祖」の伝承から「日本国始祖」というアイディアを得た一世たちは、それを移住先に生きる自らのアイデンティティ表現に活用しているのである。

(4) 被納骨者の渡日後の個人史 個人史を記した部分に最も頻繁に使われる表現は「多年大阪居住」であるが、そうした単なる生活場所の記録の他にも、渡日後の学歴や就いた職業等の経歴、あるいは会社を興したり、社会福祉的な事業を行なったことなど、被納骨者の目覚ましい業績を書き添えることが多い。在日韓国人・朝鮮人の政治団体である「民団（在日本大韓民国民団）」と「総連（在日本朝鮮人総連合会）」で幹部を勤めたような人物は、必ずと言っていいほど墓誌にそのことを記している。また、祖先の墓の整備といった本国における功勞についての言及も、しばしば見受けられる。時には、さまざまな貢献や寄与に対して本国の政府（大韓民国・朝鮮民主主義人民共和国）から表彰や勲章を受けたことも記されている。こうした個人史に関する言及は、同一宗族のコミュニティにおける被納骨者およびその家族の位置や卓越性を、周囲に誇示するものであると考えられる。

(5) 賛辞や遺訓などの墓碑銘 以上のような、いわば伝承や歴史に属するもの以外に、被納骨者や建墓者あるいは遺族らの意思や情感を題材にした墓碑銘も、数少ないながら存在する。例えば、「性格順直、品行端正、學於京都、教於鄉土、家門之榮、世人之範、命雖天道、斯入可惜」という文面は子から親への賛辞であり、「後生対遺訓 崇祖・愛族・愛郷・正義」といった遺訓は、祖先や親族とのつながりや故郷との結びつきを重視する者のメッセージである。こうした賛辞や遺訓を含んだ墓誌は、それを読む者に、子孫から尊敬された親と、親の教えを

表3 両墓地にみる家族の記載

要素	高麗寺	光山金氏靈園
配偶者	8	17
息子	86	111
娘	43	74
嫁	26	55
婿	12	36
孫(女)	41	85
曾孫	6	7
兄弟	5	5
その他	6	16

(高麗寺では全100基の内95基、光山金氏靈園では全138基の内126基に家族の記載あり)

忠実に受けとめた子孫という調和した家族の姿を想像させるものである。

墓誌に記されるものは、ここにあげた五つの要素だけではない。観察される頻度の高さから言えば、次に説明する子孫に関する記載の方がより重要である。在日韓国・朝鮮人の建てる墓碑は一般に、直系血族・傍系血族・姻族の区別を問わず、子孫の名前を赤文字で刻んで多数列記する。名前を赤文字で刻むことは生者であることを意味しているが、光山金氏専用靈園に限らず高麗寺靈園墓地においても、とにかくなるべく多くの子孫の名前を刻もうとするかのように、そうした赤文字が墓誌中に多数並んでいる(表3および事例1)。墓誌に刻まれる子孫や親族の範囲にはばらつきが見られるが、息子や娘だけでなく、孫や曾孫の名前まで刻むケースが最も多い。嫁や婿といった姻族の名前を記録するものも、数多く見かける。このほかにも、兄弟や甥などを記したものもある²²⁾。なぜこれほどまでにたくさんの子孫を書くのかという筆者の質問に、一世のある女性は、「ほとんど単身に近い状況から始まった日本の生活では、子

や孫ができるることは大きな自慢であった。昔(移住の始まった頃)は喧嘩が起きたときの最も痛烈な罵声の一つは、子供もいないひとりぼっちのくせに、であった」と答えた。たくさんの子孫を日本に残すことは、一世にとって何よりの財産であり、同じ境遇の人々の間で自分の地位を安定させることにもつながり得るものだったのである。

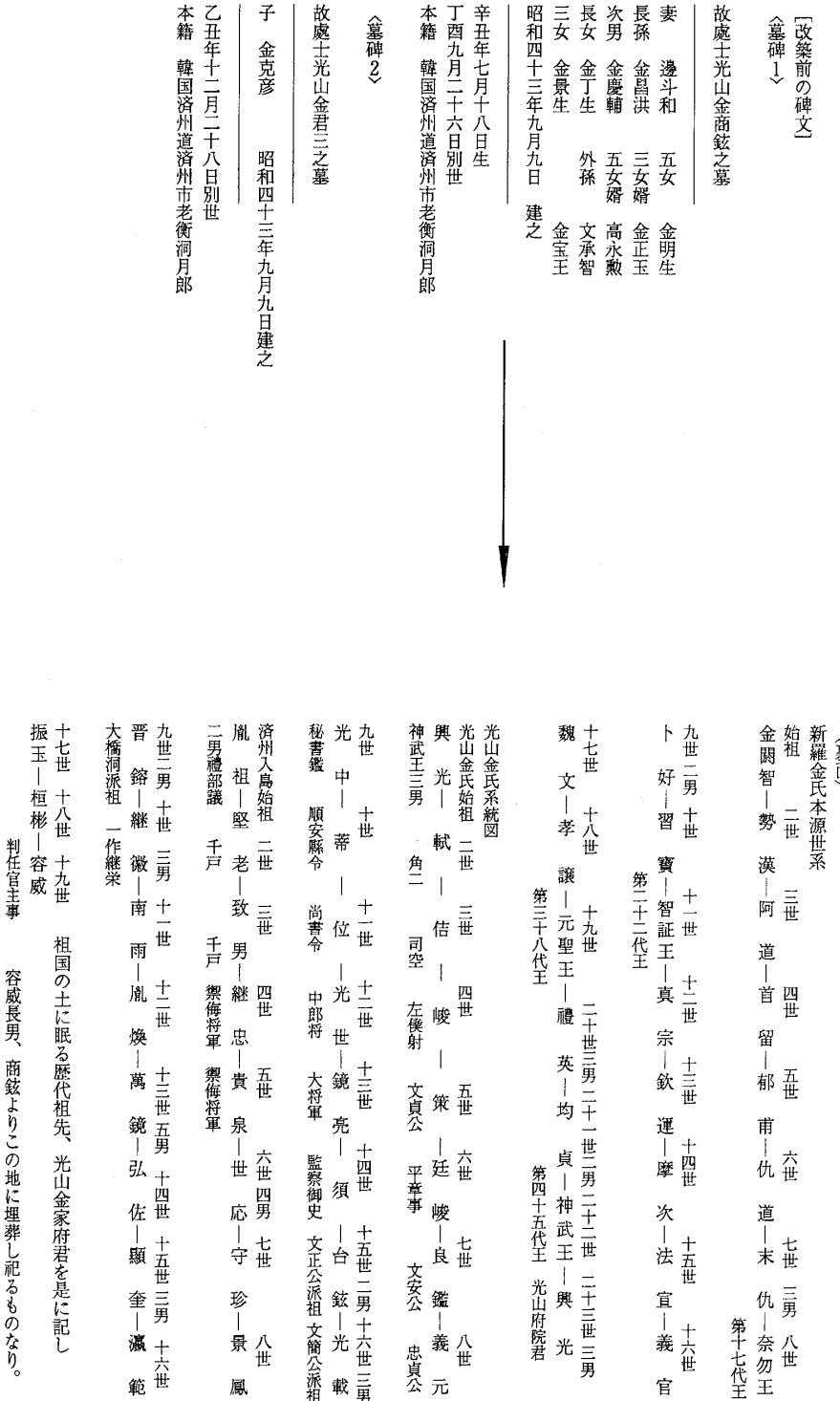
しかし、子孫の名前を墓誌に列記するのは、そうした繁栄を誇るためだけではない。というのは、刻まれた名前は、そのほとんどが朝鮮名である「本名」だからである。在日する二世や三世の中には、本名を使わないだけでなく、正しく読むことすらできない人が多い。そうした実状でありながら、息子や娘はおろか曾孫までをも本名で書き記しているのである。そこには、在日一世の子孫たちに対する強いメッセージが込められていると言えよう。今後、子孫たちが日本でどのような形で生きていくのかは見届けられないが、彼らがもともとは金あるいは李、朴等々であったという事実をどこかに残そうとした行為なのだと考えられる。実際、聞き

事例3 改築された墓 (光山金氏靈園)

〔改築前の碑文〕
墓碑1

光山金家之墓

〔改築後の碑文〕



事例3 改築された墓（光山金氏靈園）

取り調査で出会った多くの一世たちは、このことを非常に気にかけていた。

以上、在日韓国・朝鮮人の建てる墓に刻まれた長文の墓誌に備わる、様々な特徴について簡単に解説してきた。最後にもう一つ、墓碑や墓誌に関して述べておきたいことがある。それは、孝本の調査（1991年）以降、光山金氏専用霊園において改築された墓（3件4基）についてである。いずれも改築前には個人墓であり、墓誌には本籍地²³⁾、生年、没年月日、家族、建立者と建立年だけが記され、光山金氏専用霊園の墓の中ではかなりシンプルな形式のものであった。それが、残された配偶者の死去に伴い、夫婦墓あるいは家墓として改築され、新しい墓碑が建てられた。そこには、祖先に関する記録や、渡日の時期、日本での生活の状況、および被納骨者を讃える文章などが、新たに書き加えられている。家族についての記録も、以前のものに比べてより広い範囲まで、詳しく書かれるようになった。

改築された3件の中で、1件はもともと親子二代の個人墓2基をまとめて一つの家墓にしたケースである（事例3参照）。この新しい家墓は、他の墓と比べて、外観上も墓誌の内容も大きく異なる。外観の違いとしては、大きな地上納骨室と高さ1メートル幅1.2メートルにもなる大型の洋式墓碑（幅広の平石を用いた墓碑）を備えている点が挙げられる。それによって、今までより多くの記録が可能になった。正面には「光山金家之墓」とだけ刻まれているが、裏面には長文の墓誌が記されている。そこには、先に見たような光山金氏の始祖や入島祖から何代目にあたるかという記録にとどまらず、金姓全体の始祖から被納骨者に至るまでの全系譜が、一代ごとに官職名などとともに記され、末尾には誰からこの日本に葬られるようになったかが書かれている。つまり、ここにもまた、この墓の被納骨者が在日する二世以下の家族代々の「起点」であるという認識が示されているのである。また、大きな洋式墓碑の前には、親子

二代にわたる夫婦の墓碑が並べられており、もう2基ほど置けるスペースも残されている。代々の家族が入ることを見る者に明示するような墓碑や納骨施設の設置様式をとることによって、この墓は一世を起点としてつながる在日家族の姿を暗に表明しているのだとも言える。

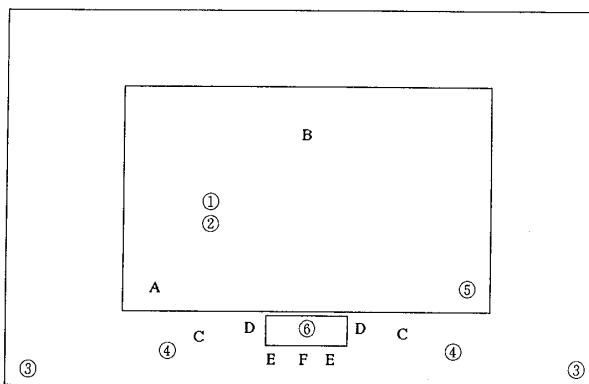
このような改築が行なわれる理由として考えられるのは、前述したように光山金氏共同霊園では一家族当たりの所有区画が限られており、そのため一家族が一ヵ所に納骨される墓を建立するためには以前に建てた個人墓あるいは夫婦墓を作り直すしかないということである。しかしその際に、他と比べてかなりシンプルだった墓碑から、並外れた大規格の石盤に家族の出自や系譜的連続性を強く意識した、より詳細かつ長文の墓誌を刻んだ墓碑に改めたということには、建立者の明白な意図が窺えるのである。

3. 入日本国祖になる一世たち

次に取り上げるS家とP家の墓は、どちらも高麗寺霊園墓地にある墓である。この二つの事例を通じてみていきたいことは、1) 墓が作られる過程、2) 墓を作った人々が表現したいことは何か、3) 結果的にどのような効果が期待されるか、の3点である。

S家の事例

S家の墓は、墓地面積が182坪にものぼる、朝鮮の王陵のように大きな封墳（土饅頭）形式の墓である。純韓国式寺院である高麗寺に釣り合う様式を持つこの墓は、1986年に完成した。調査の際、被納骨者のS氏の息子は、この墓は「光山金氏日本国始祖」の墓として公認を受けて造営されたものであると説明した。「光山金氏日本国始祖」といえば、理念的には在日の光山金氏の中で一番早く日本に来た人か、あるいは在日の光山金氏の中で行列²⁴⁾が一番早い人がなるべきものである。しかし、光山金氏の中で誰が最初に日本に来たのかは分かりにくいし、



- ① 封壙 ② 屏風石 ③ 華表
④ 文石 ⑤ 長明灯 ⑥ 祭砌

朝鮮時代経済的に豊かな人であれば設けることができたものには「祭砌」と「華表」とがある。「祭砌」とは、墓参りの時墓の前で子孫達がならんで拝礼ができるように広く平らに作ったところを示すものである。また「華表」は、埋葬されている祖先が夜遊びに出て、帰るとき迷わないように建てた印といわれている。

「文石」は、朝鮮時代に文・武の官位をともに重ねた人だけが建てができるものである。「武石」を建てることもあるがこの場合は「文石」だけを建てている。「長明燈」は墓の正面真ん中に建て、光をつけるための石燈である。この長明燈は本来なら國から禮葬として認められない限り建てることは許されなかつた。禮葬は王の名義で「扶助」(香典)が出ることによって認められ、一般の人には最高の名誉に当たることであった。

- | | |
|--------------|------|
| A 神道碑（墓誌を刻む） | D 灯籠 |
| B 功徳碑 | E 花立 |
| C 虎石（左）羊石（右） | F 香炉 |

図2 S家の墓見取り図

まして1938年に来日したS氏が最初だとは思えない。さらにS氏は、光山金氏退村公派の37世孫である。在日光山金氏親族会の会員名簿によれば、一番行列が早い会員は34世孫であり、S氏の行列はかなり低いものだといえる。にもかかわらず、この墓の威容が与える印象と遺族の語る話からみる限り、S氏は「入島祖」を下敷きにした「光山金氏入日本祖」とされているようと思える。ではこの墓は、いったいどのようなものと理解すればよいのだろうか。

まず、墓の位置について説明したい。高麗寺の靈園墓地は、その全体が四つの地区に分かれおり、それぞれ区画の大きい方から紫雲台・光明台・蓮花台・安養台と名付けられている。また墓地全体が上（東）から下（西）の方になだらかではあるが傾斜しているため、上方に行くほど全体を眺めるような景観が広がる。

もっとも見晴らしが良く、一区画面積が最大の紫雲台のほとんどが、高麗寺を建てたときの功労者たちに分けられていることが示すように、墓の位置と寺とのつきあいの深さの間には相関関係が窺える。

S氏の墓は、上記の四区画とは別格で、靈園の頭にあたる部分の一段高いところにある。そのすぐ横には、靈園全体のシンボル的存在である慰靈塔「韓・日友好平和の塔」がある。高麗寺靈園墓地において良いとされている墓地の条件は、頭にあたる部分に位置すること、広いこと、眺めがいいことなどである。それゆえ、見晴らしのよい一番頭の部分に広さ182坪にものぼる敷地を有するS家の墓は、高麗寺靈園墓地のどの墓よりも良い場所にあると言える。家族の話によれば、本来高麗寺の管長の墓を建てる場所として残してあったが、「管長も故人のこ

とをよく理解していた」ので、むしろここに墓を作ることを勧めてくれたという。とすれば、S氏の墓の位置は、高麗寺全体を通じてS家が他家と比べて相当に重要視されていることを示していると言えよう。

場所の良さだけでなく、墓をどのように治飾しているかも見落とせない。治飾とは、墓の周囲の設計をも含めた装飾のことを指す。光山金氏専用靈園では複雑な墓誌の文章で各家が互いに差を付けていたといえるのに対し、高麗寺靈園墓地ではそれぞれの家が墓の治飾で他家との差異づけを図っており、区画が最も広い紫雲台にある墓の治飾はたいてい手の込んだ高級なものが多い。S家の墓の治飾は、伝統的な朝鮮の貴族の墳墓を模したものになっており、石塔や石像など墓を飾る建造物はすべて韓国で作って運ばせたという。朝鮮時代の墓の治飾は本来、風水²⁵⁾上必要とされる物を被埋葬者の地位と家門のランクに合わせて設置するもので、その内容は慣例によって厳密に定められていた。図2に示したように、S家の墓はその周囲を壮麗かつ精妙に飾っている。そのままは王朝時代の王族の墓に比すべきほどである。図の中で説明してあるように、朝鮮時代には生前高位の官職に就いていた者のみが設置できた文石や武石、王の名義で「扶助」(香典)が出た人だけに許可される長明燈などは、朝鮮の伝統文化の中でも最も高級な文化要素を持ち込んできたものと言える。他の墓と比べて何よりも異なっている点は、火葬でありながら外見においては土葬の形式を完全に模して、非常に大きい封壙(土饅頭)を築いているというところである。また、その周りを「屏風石」をもって囲み、そこに十二支の動物を象った精妙な彫刻まで施している。

見てきたように、S家の墓はその位置、規模および治飾の点で、並ぶものがない。しかし、それだけではない。S氏の遺族(特に妻と長男)は、この墓を光山金氏という宗族の日本国始祖の墓として位置付け、そのことを周囲に公言できるように各方面に働きかけてきた。ま

ず、韓国に出向いて、一家の長の個人墓としてではなく、一族の移住の始祖(入日本祖)としての記念墓を建てるについて、本国におけるコミュニティである宗親会から同意を得るための活動を行なった。さらに長男は、高麗寺の管長に紹介されて在日光山金氏の親族会に入会し、そこからも同様の承諾を取り付けようと、さまざまな手続きを踏み行なった。そうしたコンセンサスを、系譜を共有する集団から引き出すことによって、家族の長であったS氏を光山金氏の日本国始祖としてアピールできる根拠を整えていこうとしたのである。

また、この墓ができるまでには、高麗寺の管長の果たした役割も大きかった。S氏の遺族と管長との関係は、S氏の死後はじまった。S氏は生前、韓国に墓を建立することを希望していた。しかし、韓国とのつながりが薄くなった状況で、墓の管理に無理があることから、日本に墓を建立することになったという。ちょうどそのころ、普賢寺に通う親戚から、「ウリマル」(朝鮮・韓国語のこと。直訳すれば「私たちの言葉」を意味する)の経を読んでもらえる寺として高麗寺を紹介された。この管長は、単にウリマルの読経ができる韓国人僧というだけではなく、S家と同じ光山金氏であった。管長はS家が墓を作るにあたってさまざまな面で親身になってアドバイスをした。それはまず、父の偉大さを墓に表現したいという遺族の願いを聞き入れた上で、それなら個人の墓ではなく光山金氏の日本国始祖の墓として建立するのが相応しいのではないかと提案することに始まり、その目的を達するためにS氏の夫人と長男を関係筋に紹介したり、墓の形態や設計を決めるため仏教式の墓を参考にしようと東南アジア諸国や韓国を回るS氏夫人に同行することにまで及んだ。そうしたことによって、豪華な貴族風の朝鮮式の墓が、民族意識を前面に打ち出している高麗寺²⁶⁾の一等地に建てられることになったのである。高麗寺を名のある民族寺院として確立させたい管長の狙いと、遺族の故人を讃えたいとの

想いが重なり合ったからこそ、かくも立派な墓ができるとも考えられよう。

S氏の墓にある高さ2.5メートルほどの朝鮮式の墓碑には、一千字にも及ぶ長文の墓誌が格調高い漢文で刻まれている。その内容は順に、子孫が哀悼の心を込めて碑を建てたこと、S氏の個人史と業績、先祖の事跡、S氏の孫までの家族の名、故人を讃える文、から成っている。

個人史にふれた部分によると、S氏は1924年生まれ。慶尚北道出身で14歳の時、単身で日本に渡って来た。東京・埼玉・神奈川で働き、山口県に移って三つの会社を経営し、大きく成功した。その財産をもって福祉事業を行ったり、故郷に小学校を建てたり、橋を作ったりした。またS氏は、大阪の在日商工人会でも長年重要な地位にいたこと也有り、かなりの私財を韓国や同胞機関に寄付し、感謝状や勲章を受けている。このように、S氏が経済的な成功を基盤に、韓国と同胞の両社会でかなりの信頼を勝ち得ていたことが文面にはよく示されている。S氏の成功の恩恵は、祖国や同胞社会だけではなく、また韓国に住んでいる親類にまで及んだ。親類の子供に学費を出したり、兄弟を経済的な面で助けたなどといったことが墓碑に刻まれている。こういったプライベートな援助内容まで墓誌に記述するのは、珍しいことである。

墓誌は、つづいて先祖に関する記録に移っていく。まず、光山金氏の始祖以前の「金氏」全体の始祖とされている、新羅の王族の歴史が語られ、それから高麗時代の祖先にふれた後、朝鮮時代の著名な祖先に言及する。そこでは、光山金氏がいかに朝鮮社会の中で重要な存在であったかが示されている。碑面にはさらに、S氏の四代前の先祖から父母にいたるまでの名前が挙げられ、最後に遺族である四男一女とその結婚相手および孫の名前が書かれている。系譜をたどったり、子孫の名前を列記するところは、これまで見てきた墓誌と大して変わらないとも言えるが、その直後に続く墓誌の最終部分はどの墓のものよりも手が込んでいる。それ

は、故人を讃える賛辞となっており、その労苦と成功、仁孝に厚い行ない等が強調されている。そして、そのような故人の遺業を靈芝の根の香りにたとえ、その根につながる「公之後」つまり子孫がこの地（日本）で大いに栄えるはずだという言葉で締め括られている²⁷⁾。

この「光山金氏入日本祖」の墓を理解するためには、まず日本社会＝ホスト社会と在日社会＝ゲスト社会という区別あるいは対立を想定してみるべきだろう。するとこの墓は、ホスト側である日本社会一般を対象として、在日韓国・朝鮮人全体を代表してその固有の文化を表現したものとみなすことができる。もし、S家一家だけを代表するための墓であれば、これほどの規模で治飾したり、祖国の宗族会および日本の親族会に承認を得ようとする努力も必要なかったであろう。すでに述べたようにS氏の墓は、韓国の王朝時代の貴族の様式を再現したという体裁を持っている。それはS家が普通の庶民であることを考えれば、相當に文化のコンテキストからはずれた行為であるとも言える。もし韓国であったならば、このような壮大な墓にすることは、おそらくはばかられたであろう。しかし、移住先の日本社会に建てるのならば、本来の文化的コンテキストの圧力は弱まる。

実際、この墓はホスト側の日本社会から見ている限り、素直に「朝鮮の素晴らしい伝統」を示すものと受け取られるであろう。しかも、それは建立位置の関係で、高麗寺の催事に招待される多くの日本人の目にとまらずにいない。S家の側としても、そういうホスト社会を意識しなかったとは思えない。S家がわざわざ国内の親族会や本国の宗親会から、その墓を「光山金氏入日本祖」のものとして公認する同意を取り付けようとしたのも、その壮麗な墓をゲスト集団の統一意思に基づく民族的な自己主張としてホスト集団に提示したいがためであったことは、容易に想像されるところである。そうしたS家の主張がある程度認められたからこそ、「公認」も得られたのであろう²⁸⁾。さらに、高

麗寺の管長とのいきさつを考えれば、民族性を重視する彼の意向や思惑が反映しなかったとも考えにくい。S家の墓がホスト側の目にゲスト側の結束と民族的アイデンティティの高らかな宣言と映るとしても、それは無理のないことと言うよりも、ゲスト側からすればまさに狙い通りのことなのである。

しかし、視点を切り替えて、ゲスト社会内部に目を向けてみると、そこにはホスト側からの素朴な視線では捉えきれなかった、さまざまな葛藤が立ち現れてくる。「入島祖」の伝承を共有する人々の間では、今日でもその存在は、「宗族のなかで初めて済州道に入ってきた人物」であると認識されている。一方、S氏の墓を光山金氏の日本国始祖として建立することは、ホスト社会においてさまざまな形で成功するとともに、ゲスト社会のさまざまな意向や思惑をある程度まで汲み上げることによってはじめて可能になったものであり、一宗族の中で初めて日本に来たからではなかった²⁹⁾。したがって、S氏が「入島祖」の再来、すなわち「光山金氏入日本祖」となることは、本来の理念的な意味では決して起こり得ないことなのである。事実、S氏を「光山金氏入日本祖」として扱っているのは、光山金氏全体ではなく、残された家族や親族だけである。S氏の墓に墓参³⁰⁾に訪れるのはS家のメンバーばかりであり、一般的の光山金氏は一人もいない。また、この墓のことを知る在日韓国・朝鮮人の評価はさまざまであり、祖先を大事にしているとほめる人もいるが、自分の成功を露骨に表しているとか、見栄をはっているだけだと非難する人もいる。つまり、ゲスト社会の内部に分け入ってみれば、そこにはS氏を入日本祖とみなす総意は形成されていないと言わざるを得ない。緊張関係にあるホスト社会に対しては一致団結しているように振る舞っても、そうだからといってゲスト社会そのものがもともと一枚岩であるわけではなく、その内側には、家族ごと、個人ごとの葛藤が孕まれているのである。ゲスト社会内部にお

ける緊張関係や葛藤状況の下では、S氏の位置付けは、決して在日韓国・朝鮮人あるいは光山金氏全体の代表とはなり得ず、現在の在日S家の祖にとどまるものなのである。

聞き取り調査のさいに長男の妻は終始一貫して「父（S氏）は熱烈な愛國者だった」と表現していた。遺族たちはこれほど大きな墓を建てる妥当性を、S氏本人の祖国に対する愛国心に求めるようであった。しかし、墓誌に刻まれた文面にあらわれるS氏のイメージは、「十代に単身で異国に来て、厳しい環境のなかで成功して現在の家族の基を築き残した、韓国からの移民一家の長」である。その意味でこの墓は、韓国から渡ってきた一世の日本における「家興し」の願望を形のあるものとして残し、子孫に伝え維持したいという、S氏夫人を始めとする遺族たちの願いの現われであるともいえる。

「日本国始祖」の墓は、いわば在日による家興しの継承を家族の内部において確認するための装置でもあったのである。その場合、家族は、尊敬している一家の長の徳を讃えるとともに、今後の日本においての家の繁栄の願いを込めて巨大な墓を建立したのであり、それをより効果的に表現するために民族的文化要素を選んだのだと考えられる。

最後にもう一つ付け加えるならば、このS家の墓は、在日同胞の中におけるS家の卓越性を示すための表現であるとも言える。そのことは、何よりもその偉容を見れば即座に理解されることである。S氏が日本で大成功したことはゲスト社会の中ではつとに知られていることであるが、この壯麗な墓はそのことを明示的な形で恒久的に表現することによって、S氏一家を他の多くの在日一家から差異づけ続ける。また、繰り返しになるのであえて詳述しないが、巨大な墓碑に記された墓誌の内容も、そうした差異化を志向するS家のアイデンティティ表現と見ることができる。内部にさまざまなレベルでの葛藤や対抗を孕んでいるゲスト社会であればこそ、一家の家興しの祖を讃える墓は、その

ままS家全体の卓越性やプライドを表現する裝置ともなっているのである。

P家の事例

もう一つの事例は、P氏が生前に作った墓である。被納骨者となる予定のP氏は存命中であり、そのため彼の名前は墓碑面に赤文字で記されている。P氏は四歳の時に来日しており、日本での経験は二世のそれとかなり近いと言える。現在では建設会社を経営して経済的にも安定し、民団の役員も務め、在日コミュニティーの中では高い信頼を寄せられる立場にある。P氏も、S氏らと同じく移住先の日本でかなりの成功を収めた一人なのである。そして彼の墓（事例4）も、先に見た多くの墓碑と同様に、多くの事項を盛り込んだ長文の墓誌を、墓碑横に建てた靈標に刻んでいる。しかし、ほかの墓にはあまり見られないような特徴もいくつかある。一つは、墓誌の最後に付け加えられている次のような文句である。

「異国一生涯 為後孫標記 茲地帰化土 望観察探根」

（異国の一生涯 後孫の為に標記す 茲地に土と帰化す 望むらくは観察して根を探らんことを）

この遺訓は、故人の業績を讃えたり理想的な家族像を描いたりするものではない。その代わり、移住者として生きた生涯の記録をここに残すと、家族や子孫に対して直截に宣言している。そして、自分に続く者たちが「観察して根を探ることを望んでいるのである。他の墓碑にも似たような文意を含むものがないわけではないが、この事例が最も鮮明かつ明示的な表現をとっている。

もう一つは、靈の建立者として自分自身の名前を刻んでいる点である。ふつう、建立者として名が記されるのは長男などの直系男子である。たとえ、実際には被埋葬者自身や配偶者、兄弟、その他の親類などが墓建立の中心的役割を担った場合でも、建立者名は直系男子のものを

記すのが一般的である（事例2もその一例である）。さらに、第3の特徴として、族譜（P氏とその男系一族の名ももちろん記載されている）と、わざわざ特別注文して作った家族のアルバムを、特殊包装を施して墓に納めていることが挙げられる。家族アルバムは全部で11ページからなり、1960年代の生まれ故郷の写真とそのときに故郷を訪問しているP氏の両親の写真のほか、韓国の親族、祖父母、父母の墓地の写真、日本で撮った日本在留の親族一同の写真などが載っている。

P氏は、なぜ生きている間にこのような墓を完成させ、そればかりか族譜や日韓両国の親族たちの写真と一緒に納めているのだろうか。

P氏は、たしかに移住先の社会で経済的に成功したし、子孫も二男一女をもうけることができた。しかし、その三人の子供のうち二人が日本人と結婚し、日本国籍を取得するといったようなことが起こったのである。P氏によれば、次男だけは韓国人と結婚したので、一流ホテルで純韓国式の挙式をP氏本人の企画により盛大に執り行なうことができたという。しかし、長男は父親の反対を押し切って日本人女性と結婚したので、日本のしきたりにしづしづ従わざるを得なかった。また、娘の場合は、日本人と結婚して国籍も日本籍に変えてしまった。P氏は彼女の結婚式に欠席することで自分の気持ちを周囲に示したといいう³¹⁾。在日をとりまく厳しい現実の結果とはいえ、こうした一連の出来事は、P氏に、家族のあり方が自分の望んでいる方向には進んでいないように感じさせるものであった。しかも、P氏は民族組織で幹部を務めている人物である。彼にとって、子供たちの生き方は、民族的な規範を逸したものに映っている。日本人との結婚や日本国籍の取得は、そうした組織の中核をなす一世同士の間では、いまだにいわば面子が立たない事態なのである。このように、父親の期待とは裏腹に、ますます「朝鮮」を切り放していきそうな子供たちの生きざまを見ていて思いついたのが、墓の建立で

異文化における移住者のアイデンティティ表現の重層性

事例4 P家の靈標
(正面)

密陽朴公成王之墓

新羅始祖王赫居世之四十五世孫 中祖名鉉 高麗中期文科司憲糾正三品致任之十五世孫名世煥 之次男名守恒 之三男名致健 之二十一世孫名再鎭 之次男名永戒 之五代孫 二十七世孫也

二十六世孫父親名 商伴 俗名昌玉号蘿山
一九〇一年一月九日生 一九七八年五月二十一日没 享年七十八歳
母親金海金三春

一八九八年九月二十四日生 一九七七年六月十三日没 享年八十歳
建墓地 韓國慶尚南道陜川郡雙冊面烏西里万戸田燈 (西南) 雙墳 三男三女

長男 成王 二男 成權 三男 成仁
長女 貞順 二女 貞姫 三女 貞枝
一九二七年父親昌玉 開化文明渡日身
一九二八年當年四歲母親金三春同伴父從渡
日本國平生居也

(裏面)
妻・長男・長男の子・二男・二男の子・長女の名と生年月日記す

異国一生涯
為後孫標記
茲地帰化土
望觀察探根

西紀一九九三年七月吉日
二十七世孫 成王建立

事例4 P家の靈標

あった。

P氏は次のように語ってくれた。「私の子供たちは自分が誰であるかということをまだわかっている」が、しかしその世代が日本に根を下ろそうと決意している以上、「これから六代七代といったように遠くなつていけば、なんにも残らないと思う。そこで、彼らがもし墓の中を探ってみればわかるのではないかと、一人で考えて企画した。」族譜や家族アルバムを墓に納めたのは、このためだったのである。子孫たちが自らのアイデンティティのおおもとを探ろうとしたときのための用意だったのである。そうであればこそ、「望觀察探根」という文言を刻み込んだ靈標を生前に建立したのである。そこには、日本国籍を取得した子供たちやその子孫に対する、「根」を失うのではないかという危惧と、「根」を探ってほしいという訴えが込められていると言えよう。

もっとも、日本人と結婚したり日本国籍を取ったからといって必ずしも同化志向を持っているとは限らない。本来、「根」と結婚や国籍とは異なる問題であるはずである。しかしP氏は、自分たちの「根」の存在およびそのありようを今のうちに確固たる記録にしておかねば、という気持ちに駆られている。それは、S家の場合とは異なり、P家では一世と二世との間に意識の違いが先鋭的に現われているからだと考えられる。こうした世代間の意識のずれを痛切に感じ取った一世の心の中で、後裔たちが本来の「根」を忘れるのではないかという不安や憂慮が何倍にも増幅されたであろうことは想像に難くない。その結果、「根」を熟知し、「根」の一部でもある自分自身が生きている間に、子孫たちのために確実な記録を残すとともに、彼らに明確なメッセージを伝えようと、いろいろな工夫を凝らした墓を作ったのである。つまり、

このP氏の墓は、日本に同化していく二世およびそれに続く後裔たちに対する、一世の「根」としてのアイデンティティの刻印であると解釈できる³²⁾。

ここで行なわれているアイデンティティ表現には、たしかに民族的な文化要素がふんだんに用いられている。また、探られるべき「根」とは民族的出自のことであるとも受け取れる。しかし、P氏のケースで問題の鍵となっていたのは、一世と二世の関係であった。それは、日本社会や在日家族といった集団間の問題ではなく、個人間の関係、すなわち父と各々の子孫との関係である。靈標に見られる表現が切迫した色合いを持つものになっているのも、それがまさにいま生きている身近な個人対個人におけるアイデンティティ表現であったからではないだろうか。P氏の墓に見られるさまざまな特徴は、たしかに「民族的」アイデンティティの現われでもあるが、同時に実は、一世であるP氏個人の子孫たちに対する自分らしさの表現であったとも解釈できるのである。

4. 考察

はじめに述べたように、本稿の視点は、移民者の建てる独特的な墓を、新たな文化創出を伴う形で行なわれる、多面的な自分らしさを持った個々の人間単位（もしくは家族単位）の自己表現あるいは意思表示として捉えていこうというものであった。その視点に沿った分析や解釈は、ここまで論述においても、いくつかの部分に分散しながらではあるが、すでにいくつも提示してきた。そこで以下では、これまでの論点を整理しつつ総合的に考察することによって、在日韓国・朝鮮人の墓碑の諸特徴として現われているアイデンティティ表現の重層性を明らかにしてみよう。

①在日韓国・朝鮮人の専用靈園で見られる墓は「民族的アイデンティティ」を表すものであると同時に、一家や個人を表現するメディアで

もある。

靈園を一つの総体と見れば、それは紛れもなく日本社会一般に向けた民族的アイデンティティの表現であると言える。なにより、調査対象になった在日韓国・朝鮮人専用の靈園や、その運営母体である親族会や韓国寺は、その日本における存在自体がすでに民族性の表現と捉えられるものである。そして実際に、そうした靈園の指導者たちはさまざまな形で民族的精神の発揚に努めてもいる。

一方、プライベートなメディアとして個々の墓碑の内容を見ていくば、そこには被納骨者やその家族の私的な自己表現も強く込められていることがわかる。在日韓国・朝鮮人の専用靈園という、ある意味で閉じた空間の中に墓を作るとき、個々の人間や家族にまず意識されるものは、日本社会一般というよりも、むしろ移住者仲間すなわち「在日同胞」であると考えられる。つまり、個々の墓は、何よりもまず在日韓国・朝鮮人同士の間で交わされる、個人や家族単位の私的な自己表現のメディアとしてあると言える。墓誌は、それを通して本人やその家族と、他の在日同胞との差異を明らかにするための、私的なアイデンティティ表現でもあるのである。例えば、渡日の記録や個人史を記した墓誌の文章は、まさしくそうしたものであった。そこでは、一代で身代を築いた成功者として、在日社会における功労者として、祖国への貢献者として、あるいは親密な絆で結ばれた理想的な家族として、他とは異なる己のアイデンティティが語られている。

もちろん、墓誌に組み込まれている文化要素群の中には、朝鮮の伝統文化を色濃く宿したものがいくつもある。正面に刻まれた本貫や官位、あるいは始祖や入島祖への言及などは、その例である。たしかにこうした要素は、一面においては民族的アイデンティティを表現するものである。しかし、専用靈園を使用する在日韓国・朝鮮人（特に一世たち）の間ではそれらはごく当たり前に通用する民族的な文化要素であ

るがゆえに、かえってそこに墓を建てた家族の間にある差異を表示し、一家や個人の卓越性を誇示する機能を果たし得るものになっている。なぜなら、先祖の系譜を刻むことでその家族の出自が確かなものであることを強調したり宗族の中での世代関係を明確化することができ、先祖の事跡を詳細に記したり長文の漢文を書くことによって古典的教養を身につけたよい家柄であることを表わすことができ³³⁾、子孫の名前を多く記したり墓碑を朝鮮文化の粹を凝らして飾ることで家族の日本での成功や繁栄を示すことができるからである。つまり、民族的な色合いの濃い文化要素であっても、表現のおかれる文脈によっては、個人や家族のアイデンティティ表現のイディオムとなるのである。かくして個々の墓碑は、同じ靈園に墓を建て墓参に集まる「在日同胞」たちの中において自己を際立たせ、集団の中での位置や他との差異（自分らしさ）を表現しようとしたものであり、また同時にそうしたものを自己確認するための装置でもあったことが理解されよう。

ただし、こうした差異づけは非常に微妙なものとなる。というのは、専用靈園ではない日本人との共同靈園にある在日韓国・朝鮮人の墓なら、本貫や官位を記し、本名を書くだけで十分に周囲の墓との差異を示すことができようが、専用靈園の中では、それらは共有されたものである。こうした共通の民族的文化要素を使いながら差異化を図ろうとすれば、その表現は必然的に、部外者には理解できない、より微細な部分にこだわった、より特殊化したローカルな部分で競いあうものにならざるを得ない。しかも、在日韓国・朝鮮人の墓では、伝統的な日本文化の文脈から適切な文化要素を選び出し、自己表現の手段として利用することも行なわれている。その結果、移住者の自己表現としての墓は、伝統的な日朝両文化の文脈を越えるような形で、また細部にわたって洗練された形で、さまざまな文化要素を組み合わせたものになっている。

②在日韓国・朝鮮人の建てる墓碑は、以上のように在日同胞一般に向けた自己表現であると同時にまた、一世から始まった日本における家族集団や、今後日本で生まれ暮らしていく子孫たちに向けた自己表現もしくは意思表示もある。

祖先の系譜を詳しく墓碑に記すことや、家族全員の「本名」を列挙することは、祖先や民族性を意識した行為という面もあろうが、それ以上に今後どのように変わっていってしまうか予想もつかない子孫たちを意識した行為であると考えられる。個人史などに渡日時期を銘記したりすることも、同じように考えることができよう。また、墓誌正面の書き方のうち特に家墓と代々墓の形式をとるものからは、被納骨者である在日一世が在日する家族の代表的存在であり、後に続く子孫たちの起点あるいは家の歴史の始源であるという意識も読み取れる。一世たちは渡日後の苦労によって安定した一家を作り上げた「家興しの基」としてのアイデンティティを、後続の者たちに提示しているのである。

「入島祖」という文化要素を下敷きにした「日本国始祖」や「入日本祖」の事例は、そうしたメッセージの最も顕著な現われである。在日韓国・朝鮮人の場合、生まれ故郷である朝鮮の価値観を保持している一世と、日本で生まれ育った二世・三世の意識はかなり異なる。こうした状況の下で使われる「日本国始祖」という言葉は、単に伝統的な朝鮮の文化要素を在日のケースに読み換えているわけではなく、家興しの起点であった一世の存在の大きさを二世・三世に伝え、少しでも継承してもらおうという意思表示に他ならない。

このように、在日韓国・朝鮮人の墓碑は、家族や子孫たちへの自己提示、意思表示でもあるわけだが、そこに用いられた表現手段は、移住者であるがゆえの利点を活かしたものであった。移住者は境界的存在であるために、松田のいう「選択肢の範域」は日朝双方の墓制や文化伝統に広がる。それだけでなく、どちらの社会から

見ても周縁であることから、伝統を保持しなければならない、という社会的、文化的な規制は弱まっている。そのため、個人が自由な表現を創造する機会に恵まれており、自己表現のため今まで見てきたようなさまざまな特徴を持つ墓碑を作ることが可能となっているのである。

以上、在日韓国・朝鮮人の墓に見られる、新たな文化創出を伴うアイデンティティ表現について、①と②に整理しながら考察してきたが、その重層的性格を要約し直せば、次のようになる。すなわち、これらの墓は、日本との対比において、朝鮮の民族的文化要素を共有している点で同類のものであるが、その墓誌の内容にまで踏み込めば、系譜の詳しさ、家族の多さ、経済的成功や功績の強調などの面で、むしろそれぞれの墓の間に差異化が図られている。しかも、その差異は家族の間で共有されるはずものであるが、同時に一世と二・三世との価値観のずれによって両者の対立点にもなり得ている。渡日の事実の記載や、家族の基点として、あるいは「入日本祖」として一世を表わすことは、一世を二・三世とは異なるものとして提示することになる。在日同胞の中の各家族、さらに一つの家族の中の各世代、といった複数のレベルでの重層的なアイデンティティ表現を、一つの墓が一手に担っているのである。

逆に、家族ごとの差異や世代ごとの差異を示すような表現も、たとえば日本社会に対して提示された場合には「在日韓国・朝鮮人」の姿を示すことになる。文化要素を共有する専用靈園の中では、家族間の差異化が細部にこだわった洗練された表現によって行なわれるため、民族色がいっそう醸し出される傾向にある。特に家族内の二世、三世に対して疑問を抱いているような一世のアイデンティティ表現では、よりいっそう「民族」が強調されがちである。このため家族や世代レベルでのアイデンティティ表現は、同時に民族的アイデンティティの表現としても説得力あるものになり得るのである³⁴⁾。

おわりに

本稿の議論は、その骨格だけをとれば、人が行なう自己表現は、それを通じたコミュニケーションの相手として想定する対象ごとに、異なったレベルのアイデンティティを提示していく、というある意味で単純な、あるいは当然ともいえる帰結にいたった。にもかかわらずこのような議論を提出するのには、理由がある。その一つは、在日韓国・朝鮮人は日本社会におけるマイノリティとしてのイメージが強いということ。もう一つは、そのイメージのために今まで行われてきた研究に以下のような偏りが見られるということである。

一般に、ある社会集団に関してマイノリティとしてのイメージが広く行き渡っている場合、彼らの置かれている特殊な状況が強調されるあまり、誰にでも起こり得る普遍的な問題は語られにくくなる。「問題の所在」においても言及したように、従来の在日韓国・朝鮮人の研究もその典型的な一例である。支配者を批判しようとする意図から彼らの被害者としての立場を強調する研究、あるいは彼らが不利な立場にもかかわらず権力に抵抗して民族文化を維持・伝承しつつアイデンティティを構築していく姿を共感を寄せつつ探る研究といった、いわば「善意」からの研究が行われてきている。どちらの研究も「自分の声を持たない彼ら」のために研究者が代弁することによって、それなりの「役割」を果たしてきたかも知れない。しかし、彼らをマイノリティ・イメージの下に置いたまま描くことは、新たなステレオタイプの形成につながってしまい、同時に彼らが実際に生きている複雑な状況を浮かび上がらせるに対する障壁としても働いてしまう。本文でも説明したように、民族的文化要素を使用して提示されたものを全て民族的アイデンティティの表現として見てしまうと、彼らに対立する相手は常に日本人だということになり、その対立図式が強調

される限り，在日韓国・朝鮮人はその内部に何の葛藤もないままに一丸となって日本人に対抗しているようにみえてしまう。そうなれば、日本人と在日韓国・朝鮮人の関係は、いつまでもマジョリティとマイノリティという粗雑な対抗関係としてしか描くことができない。

筆者としては、本稿がこのようなマイノリティの研究動向に対する、一つの突破口となることを期待している。そのため本稿では、マイノリティ集団の内部を詳しく見ることで、誰にでも経験され得るようなアイデンティティをめぐる一般的な問題状況を描くことに努めたつもりである。もちろんこれは、日本社会で在日韓国・朝鮮人が置かれているマイノリティとしての苦しい立場を見ないで済まそうということではない。マイノリティとマジョリティという対立の枠組みを越えて、移住者たちのもっと普遍的な人間や社会の姿を描いていくための一試論として位置づけたい。

したがって，在日韓国・朝鮮人の集団内での問題に限っても、やり残したことは数多くある。例えば、二世・三世たちは、子孫を意識した在日一世たちの自己表現や意思表示をどのように受けとっているのであろうか。一世と二世・三世の間のずれを考慮したとき、両者の間におけるメッセージの伝達と解釈の過程を問題にする必要があろう。さらに、墓をメディアとして使ってはいない在日韓国・朝鮮人（たとえば日本に墓を持っていない人、女性、子孫たちなど）がそれをどのように見ているのか、また他にどのようなメディアを持っているのか、等々を見ていくことも今後の課題としていきたい。

謝辞

本稿は1995年3月京都大学人間・環境学研究科に提出した修士論文「文化の移築とアイデンティティの生成」の一部をまとめなおしたものである。また、本稿の一部については、日本民族学会第29回研究大会（1995）と「宗教と社会」学会第3回学術大会（1995）、神戸大学人類

学研究会（1996）において発表したが、その際多くの方々から有益な助言をいただいたことに感謝したい。修士論文の執筆に当たっては、指導教官の福井勝義先生、谷泰先生、菅原和孝先生、田中雅一先生に大変お世話になった。また、飯田剛史先生（富山大学）、本田洋氏（東京外国语大学）からは原稿の段階で有意義なコメントを寄せていただいた。謹んで謝意を表したい。

調査の際にお世話になった高麗寺の管長と光山金氏親族会の役員をはじめとするみなさんには深謝するとともに、生野区調査中に家族の一員として同居させて下さった高家のみなさんにも、この場を借りてお礼申し上げたい。

最後にもう一人、草稿段階から何度も日本語チェックに付き合ってくれた鈴木健太郎さん（東京大学大学院）にも、衷心よりありがとうございます。

注

- 1) 在日韓国・朝鮮人の研究において、彼らを指す名称には、「在日韓国人」「在日朝鮮人」「在日韓国・朝鮮人」「在日コリアン」「朝鮮人」「韓国人」などがある。本稿では「在日韓国・朝鮮人」という名称を選び、現在南の韓国籍を持っている人、もとの朝鮮籍を持っている人、および日本の国籍を取得した人を総称する用語として用いる。
- 2) (Wagner 1951) は戦後の占領時代の在日韓国・朝鮮人の実態を詳しく記録している。民団と朝鮮総連系の組織的活動を中心に記述したものとしては (Mitchell 1967)，在日韓国・朝鮮人の社会内の葛藤を扱ったものとしては (Lee Changsoo and Romanicci-Ross 1982) がある。 (Lee and De Vos 1981) は日本人の間に根強く存在する在日に対する偏見、差別の構造、そしてそうした環境に生きる在日韓国・朝鮮人の心理状況を扱った論文である。
- 3) 朝鮮人の移住に関する概論的な研究書としては (玄奎煥1967)，在日韓国・朝鮮人の状況を広

範に描いたものとしては（金相賢1969）をあげることができる。人類学的フィールドワークを行った研究としては（李光奎1981, 1982）がある。

- 4) (飯田1995)・(小川1995)・(小川・寺岡1993)・(孝本1993)など
- 5) 孝本の調査は1991年おこなわれた、水子墓を含む全109基に関する分析である。筆者が調査した1994年5月には全体数は133基になっていた。1991年以降に改築された墓碑も3件あった。
- 6) 土葬の習慣を持っていた在日韓国・朝鮮人一世たちの中には、いまだに火葬を嫌って、死ぬ前に韓国の親戚を頼って帰国する人がいる。死後でも火葬を拒否したため遺体のまま韓国に運ばれ土葬された例もある。
- 7) 朝鮮は解放後、北緯38度線を境に、北はソ連、南はアメリカの信託統治を受けた。南半分に人民政府が準備されはじめたころ、北半分の住民のうちで、北側の政権に参加することを好まないものは、南に下ってきて、大きな政治勢力を作った。それを「西北青年隊」とよんでいる。「西北青年隊」は、韓国における進歩的団体との対決の際に表に立ち、地方都市ではしばしば両者の衝突が起こった（尹 1983：200-202）。1948年4月3日、済州道の進歩主義者たち（日本で教育を受けたものが多くいた）は、分断を固定化する南半分のみの単独選挙、単独政府樹立に反対して、政府の警察と「西北青年隊」に攻撃を開始した。これを「4・3事件」と呼ぶ。事件はその後7年以上も続いた。済州道総人口の四分の一が殺されたとも言われるこの事件は、長い間韓国政府によって隠蔽されてきた。最近、済州道の新聞社による調査が出版された。詳しくは（済民日報1994）、（泉1966：280-282）を参照。
- 8) ここで韓国というのは、朝鮮時代を含む今現在の韓国のことを探す。北朝鮮の墓制は調査できなかったため、韓国に関する記述のみを行なう。
- 9) 韓国には日本のように複数の納骨を行う家族

墓はないが、ひとつの山・斜面をある一族が墓地として占有することは多い。ここでは納骨の単位として「個人」「夫婦」「家族」を用いている。

- 10) 本貫とは氏族発祥の地名を指し、姓氏と組み合わせて表記される。たとえば金海金氏と慶州金氏とでは、同じ金姓であっても本貫が異なり、父系血縁関係を持たない他族とされる。
- 11) 本田は、韓国の墓を祖先を記念するものとして取り上げ、墓を整備する過程で祖先に関する私的な記憶や個人的欲求による動機付けが強く働くと論じている（本田1993）。
- 12) 本稿では、便宜的に墓碑の正面、両側面および裏面に記載された文章を墓誌と呼び、墓碑とは別に石盤をたてて死者の名や文章を刻むものを靈標と呼ぶことにする。
- 13) ここでは正面の書き方によって分類した。個人の名前+「～之墓」は個人墓、夫婦の名前+「～之墓」は夫婦墓とし、また個人・夫婦をとわず「～之家之墓」と記すものは家墓、「～代々之墓」と記すものは代々墓に分類している。
- 14) 日本に「先祖代々之墓」を建てる人もいるが、その場合は墓碑とは別に明らかにそれとわかるような形式で作られている。例えば、正面に「先祖代々之墓」と書いた五輪塔などである。この中には誰も納骨されず、韓国の故郷から持ち込んだ先祖の墓周辺の土や石を納め入れることがときどき行われるぐらいである。
- 15) 以下の記述は、すべて光山金氏専用靈園にある墓誌を対象にしたものである。高麗寺靈園墓地には、長い墓誌を有するものが3件しかないからである。その理由を検討することは非常に意味のあることであるが、今回は見送らざるを得ない。
- 16) 普通、一つの宗族の中にも複数の派が存在し、それぞれ特定の人物を祖（派祖）としている。
- 17) 現在の韓国や在日社会においては四代前までの祖先を直系の家族とみなし、命日に祭祀をおこなうことが多い。ちなみに、この範囲の先祖の墓の位置に言及したものが、光山金氏専用靈

- 園には9件ある。
- 18) 133基のうち118基が済州道出身者、4基が慶尚道、11基が出身地不記入であった。
 - 19) 「入島祖」の研究としては伊藤亜人の珍島の研究がある(伊藤1990)。済州道では祖先祭祀において、朝鮮社会全体をカバーする宗族の始祖よりも入島始祖の方に、より高い関心が寄せられている。(佐藤1973:129)。
 - 20) 光山金氏の始祖興光は新羅の王権争いで身の危険を感じ、現在の全羅南道の光州に移住したとされている。すなわち、中央から周辺の地方に移住したわけである。済州島への「入島祖」とされる胤祖は、興光の17世孫にあたる。危険を冒してまで済州島に移住せざるをえなかった理由は、高級官僚だった胤祖の兄にあった。胤祖の兄は、高麗末期の朝廷に影響力を及ぼしていた怪僧シントンを倒そうとして敗れ、反逆罪で処刑された。連座を免れるために胤祖は西暦1368年、当時の交通などを考えれば大変危険な済州島にまで渡り、身を隠したとされる。
 - 21) このような事情については、尹学準の記述が参考になる(尹 1983:149-157)。
 - 22) 墓誌に記される子孫や親族の範囲がどこまでなのか、例えば娘もいるが息子のみを記しているのか、息子は結婚していないのか、結婚しているが嫁は記載していないのか、などについては、今回は詳しくふれる余裕がない。いずれ別の機会に明らかにしたい。
 - 23) 本籍地を墓誌に記すことは、在日韓国・朝鮮人が日本に建てる墓のほとんどが共有している特徴の一つに数えられるが、今回は詳述することを見送った。これも別稿を期したい。
 - 24) 始祖から数えた世代数。したがって、実際の年齢の上下とは、ずれることもある。
 - 25) 朝鮮において風水は、一般に墓を通じて親しまれ、かなり広い層に認知されたものであった。在日韓国・朝鮮人の場合、墓を建てるときに朝鮮では風水を使うということぐらいは知っていても、実際に自分たちの墓を建てる際に風水を考慮することは少ない。光山金氏専用靈園では11基の墓で風水の方位が意識されており、他のものとは異なる方位が採用されているものもある。風水の研究としては、日本では渡邊欣雄のものなどがある(渡邊 1994)。
 - 26) 日本における在日韓国・朝鮮人寺は、民族的な行事などを普及させる機関としても重要な役割を果たしている。高麗寺本殿は、韓国から全ての材料を運んで作った純韓国様式の建造物である。高麗寺のパンフレットには、その本殿の写真やチマチョゴリ(韓国の伝統衣装)姿で墓参している家族の写真が載せられており、そこに付された解説には「誇り高い自国の伝統文化に目を向けること」の必要性が述べられている。さらにまた、「在日同胞の総合的な聖域を創設し、全同胞の民族意識を高めるため」に行われているさまざまな事業内容も列挙されている。
 - 27) 墓誌の最終部は次のような墓碑銘である。
 「嗚呼公早離鄉國遠寄異域其零丁苦孤可謂極矣而卒乃克成居積又以用於仁用於孝用於友古人所謂靈芝有根其香自与尋常草樹大異者豈不信矣哉吾知公之後又將大昌於此地也」
 (嗚呼、公早くに郷国を離れ、遠く異域に寄る。其零丁苦孤極まれりと謂う可し。而て卒る。乃ち克く居積を成し、又以て仁に用い、孝に用い、友に用う。古人の所謂靈芝有りて其香自ら与うは尋常の草樹に大いに異なる、豈信ぜん哉。吾知る、公之後又將に此地に於いて大いに昌えるとする也。)
 - 28) ここでは「公認」という言葉を使ったが、実際はかなり微妙な問題を含んでいる。S家は筆者に、日本の親族会と韓国側の宗親会で「日本国始祖」としての墓を建立することに関して許可を得たと表現したが、そのことについて日本の親族会の幹部に聞いたところ、「日本国始祖」の墓を建立することを承諾したというより、大規模な墓の建立に関して相談を受けたのだという。亡くなった父親のため立派な墓を建てることに関して親族会が反対する理由はないとのことであった。S家側の語りとこの幹部の話とで

- は微妙な食い違いが見られることから、S家と親族会の間にははっきりした形での承諾が交わされていなかったのではないかと想像される。つまり、互いに曖昧な受け取り方をし合っているということなのだが、しかしまさにその解釈の「ゆらぎ」にこそ、すぐ後に述べるようなゲスト集団内部における葛藤や対立が透け出していると考えられる。
- 29) 宮島によれば、朝鮮のヤンバン文化において始祖や派祖という概念には生物的な要素よりも社会的な要素が大きく働くという。すなわち、生まれた順序が早い先祖よりもむしろ社会的に成功して名を残した先祖が派祖、あるいは一族の祖になるということである。(宮島1995)
- 30) 筆者の調査期間中に都合3回行なわれた墓参りに、遺族たちは毎回S氏の孫に当たる子供たちを連れてきた。法事の際にも、北海道に住む三男と日本人と結婚した四男以外は、孫を含む家族全員が集まっていた。また、S氏の長男は、自分の子供を学校に「本名」で通わせていることを筆者にわざわざ説明してくれた。朝鮮人ということで変な誇りを持つ必要はないが、隠すことでも何でもないと教えてきたという。そういう意味で、韓国から渡日して一家の起点となったS氏の壯麗な墓と、そこへの家族総出での墓参りは、単なる祖先供養にとどまらず、「日本国始祖」S氏に始まる家族としての自己確認と紐帶の強化を可能にする壮大な演出とも見ることができる。
- 31) 長男の結婚の時と娘の結婚の時とでP氏のとった行動に差があることに関して尋ねたところ、嫁はもううが娘はとられるから日本人にとられるのは何よりも悔しい、だから結婚をまったく認めることができなかった、との回答であった。こうした考え方には、特に一世の間ではかなり広く分け持たれているようである。
- 32) ただし、こうした一世側の強烈な想い入れは、二世にとっては拘束になる場合が多い。ここから一般的にいわれる移民二世の困難な立場がみられる(李光奎 1982:1-30)。

- 33) 儒教文化の脈絡では、先祖が官途についたことや漢文の素養があることは、良い家であるとの条件として重要である。
- 34) 日本人研究者の多くが、さまざまな在日韓国人・朝鮮人の行為を民族的アイデンティティの維持あるいは表現として捉えがちであるのは、このあたりに起因するのかも知れない。

参考文献

朝倉敏夫

- 1993 「韓国の墓をめぐる問題」、藤井正雄ほか編『シリーズ比較家族2 家族と墓』64-80、東京：早稲田大学出版部。

藤井正雄

- 1993 「現代の墓地問題とその背景」、藤井正雄ほか編『シリーズ比較家族2 家族と墓』6-24、東京：早稲田大学出版部。

本田洋

- 1993 「墓を媒介とした祖先の<追慕>—韓国南西部一農村におけるサンイルの事例から」、『民族学研究』58(2)、142-169.

玄圭煥

- 1967 『韓國流移民史』上、ソウル：大韓教科書株式会社。

- 1976 『韓國流移民史』下、ソウル：大韓教科書株式会社。

玄容駿

- 1977 「濟州島の葬祭—K村の事例を中心にしてー」、『民族学研究』42(3)：249-266.

飯田剛史

- 1995a 「第4章への序」、宗教社会学の会編『宗教ネットワーク』243-246、京都：行路社。

飯田剛史

- 1995b 「親族会の概要と専用靈園」、宗教社会学の会編『宗教ネットワーク』247-257、京都：行路社。

伊藤亜人

- 1990 「韓国における祖先と歴史認識」、阿部年晴・伊藤亜人・荻原眞子編『民族文化の

- 世界（下）社会の統合と動態』196-217, 東京：小学館
- 泉靖一
1966 『済州島』, 東京：東京大学出版会.
済民日報 4・3 取材班
- 1994 『4·3 은 말 한 다』済州：済民日報, (文京洙・金重明・朴郷丘訳『済州島四·三事件』①~, 新幹社, 1995)
- 金相賢
1969 『在日韓国人：僑胞80年史』, ソウル：人文出版社.
- 孝本貢
1993 「在日コリアン家族における先祖崇拜」, 森岡清美監修『家族社会学の展開』181-193, 東京：培風館.
- Lee, Changsoo and Romaccini-Ross ed.
1982 Ethnic Identity: Cultural Continuities and change. Barkeley: University of California Press.
- Lee, Changsoo and George De Vos
1981 "Ethnic Persistence and Role Degradation: Koreans in Japan" Koreans in Japan: Ethnic Conflict and Accommodation. Barkeley: University of California Press.
- 李光奎
1981 「在日韓国人 調査研究 1」, 『韓國文化人類學』13卷1-52.
1982 「在日韓国人 調査研究 2」, 『韓國文化人類學』14卷1-30.
- 松田素二
1995 「人類学における個人, 自己, 人生」, 米山俊直編『現代人類学を学ぶ人のために』186-204, 京都：世界思想社.
- Mitchel, Richard H.
1967 The Korean Minority in Japan. Berkeley: University of California Press.
- 宮嶋博史
1995 『両班』, 東京：中央公論社
- 小川伸彦
1995 「親族会メンバーの社会的属性—在日社会および日本人社会との比較分析—」, 宗教社会学の会編『宗教ネットワーク』2 58-278, 京都：行路社.
小川伸彦・寺岡慎吾
1993 「マイノリティー組織のエスニシティー在日光山金氏親族会調査より」, 『社会学評論』44(2):131-146
- 佐藤信行
1973 「済州島の家族」, 中根千枝編『韓国農村の家族と祭儀』109-145, 東京：東京大学出版会.
- 宗教法人曹溪宗総本山普賢寺
年不詳 『聖域化が進められている高麗寺 総合計画』
- Wagner, Edward
1951 The Korean Minority in Japan. New York: Institute of Pacific Relations.
- 渡邊欣雄
1994 『風水 気の景観地理学』, 京都：人文書院.
- 尹学準
1983 『オンドル夜話』, 東京：中央公論社
在日光山金氏親族会
1989 『在日光山金氏親族会創立35周年記念誌』

Plurality of Representing Identity in Migrant Culture: a case study on tombs of Koreans in Japan

LEE Inja

Key Words: migrant, Koreans in Japan, tomb (inscription on the tombstone), representation of identity, plurality

This paper investigates, from an anthropological perspective, representation of migrants' identity with reference to tombs built by Koreans (particularly first generation) who have migrated and settled in Japan. That is the plurality of identity which also includes ethnicity.

The tombs which are dealt with in this paper stand in private cemeteries for Koreans in Japan (namely, an exclusive one for the Kyoangsan Kim family association and a communal one at Korai-ji, a Korean temple). Most families involved in building them could be described as active participants in the Korean community in Japan.

Tombs in such cemeteries do not differ in their shape from other Japanese tombs. However, the contents of the inscription on the tombstones are original and very distinct from their Japanese counterparts. The deceased's real name in Korean is inscribed in front of the tombstone, and in the Confucianist manner, kani (government position) and bonkyan (family origin) are also added. Even those which have adopted Japanese style inscriptions such as "so-and-so family (or ancestral) tomb," can be differentiated from Japanese tombs as they bear the first names of first generation individuals beside the surnames. This can be seen as a representation of the first generation individual as the "starting point" for the family in Japan. Also, many other headings are often included in inscriptions such as the genealogy of the original ancestor, paso, or iptocho, personal history with a migration diary, profession, and achievement, or a final message or teaching, poems and writings.

Next, the paper focuses on family and individual and evaluates two very interesting cases. One of them is the tomb of the S family at the Korai-ji, which possesses the size and decorations matching royal tombs. Its burial master is the Kyoangsan Kim family, though it was not built in their private cemetery. The deceased's family has been working on various sources to classify the tomb as the "Japan ancestor" for the Kyoangsan Kim family. However, from the results of my research and analysis, this huge tomb has been regarded as the starting ancestor and the symbol of family rise in Japan for the S family only, rather than as the "Japan

ancestor" for Kyoangsan Kim family.

Another example is Mr. P, who is still alive, and who has built his family tomb at Korai-ji. The tomb holds a specially ordered family album and genealogy of present relatives sealed and placed where their ashes are supposed to be laid, for the forthcoming (though it is not known specifically which generation) descendants who might be searching for their own and their ancestor's roots. The album shows photos of the Korean hometown, ancestral tombs, and group photos of all present relatives in Japan and Korea. Each photo bears explanations written by Mr. P himself. Mr. P, who has built his own tomb specifying each small detail himself, is not a special case among those who have their tombs in this cemetery. From unconstructed interviews, it could be said that this phenomenon is the result of worry among the first generation who could not expect the tomb they require from the second generation, their sons, who have a different sense of values.

From all tomb inscriptions in these two private cemeteries and the cases of P and S families, it can be considered that it is compatriots in Japan rather than Japanese society in general, of which the individuals and the families who build the tombs are conscious. In other words, individual tombstones are, in the first instance, media for private self-representation, in individual or family units, to other Koreans in Japan. An individual tombstone is a mechanism by which individuality is expressed to comrades in Japan who have their tombs in the same cemetery, the difference (individuality) and the status within the group are expressed, and these expressed elements are reconfirmed by individuals and family themselves.

It is true that grand "traditionally Korean" tombs such as the S family's or tomb inscriptions which emphasize individual's contributions to Korea, family origin, or ancestors, are for example, a form of representation with strong ethnic consciousness. However, at the same time, they are a proof of success for the family, and the expression of differentiation and superiorization within the Korean community in Japan. Similarly, from close comparative analysis of individual tomb inscriptions, irregularity in various elements such as emphasis on immigration, on family size, on family tradition, or on the extent of the genealogical details can be identified. This leads to an argument that such ethnic representation is employed, rather, to produce the difference among individual tombs.

On the other hand, those factors are to be shared between family members. Therefore, the paragraph on personal history of the immigrated first generation will be absorbed into the self-representation of the family as the originator of the family in Japan. At the same time, it can also show us the possible antagonism between first generation and second and third generations, who may not share the same sense of values. The record of their coming to Japan and the writing on tombstones which treats the first generation as the founder of the family in Japan, play a role in presenting the first generation as distinct from the second and third generations. As can be seen from the example of the P family, family is not monolithic and it holds generation gaps and antagonism within. In such a context, accounts on tombstones could be understood as generation-oriented messages, mostly from the first to second and later generations.

From this point of view, Korean tombs in Japan, which could easily be received as an expression of ethnic identity at first glance, in fact, are also a form of private self-expression by the deceased or the family themselves. Such self-expression on the levels of family or individual employs strong ethnicity-oriented cultural factors, and therefore, overlaps largely with the expression of ethnic identity. In short, their tombs are not only a one-dimensional expression of ethnicity but also an expression of identity and differentiation at various levels. In that sense they have plural messages and meanings.

The tombs dealt with in this paper are mostly built by first generation or by people in a similar situation. A number of arguments have been presented on the second generation of the immigrants, but arguments on how the first generation manage their own identity have been rare. The individual creativity and plural meanings were unfolded by analysing the representations found in these tombs in the light of the first generation's status.